巡礼道
～ご利益を求めて歩く道～

平安時代末期ごろ、観世音菩薩が33の姿かたちで民衆を救うという教えにちなみ、33カ所の霊場が札所として定められました。悩みを払い、ご利益を求めて札所を巡る巡礼は、室町時代に民衆の間に広まると、江戸時代には一段と発展し、元禄年間（1688年～1704年）には大衆化したといわれます。この33カ所の霊場を巡る経路を巡礼道といいます。播磨には第26番札所一乗寺（法華山）、第27番札所円教寺（書写山）があり、丹後の第28番札所成相寺に続いています。現存する納札を調査すると、下総や武蔵、山城、長門、肥前からやってきた巡礼者のものが多く残っており、関東や九州など全国から人が訪れていたことが分かります。

播磨にある二つの札所

第26番札所
一乗寺（法華山）

一乗寺は白雉元年（650年）に、法道仙人が開創したと伝えられています。もともと現在地より約3㎞北にある古法華自然公園内にあったといわれ、今もそこに残る石造浮彫如来及両脇侍像（白鳳時代・通称：古法華石仏）は、当時のものだといわれています。国宝・三重塔の相輪伏鉢には承安元年（1171年）の銘があり、遅くとも12世紀後半には現在地に移ったことがうかがえます。

第27番札所
円教寺（書写山）

平安時代、仏教の拠点は比叡山や高野山に代表される山岳寺院へと移り、厳しい自然条件に耐えながら修行する僧たちは「山寺の聖」と呼ばれるようになります。法華経を暗誦する聖の中で、ひときわ抜きん出た存在が書写山を開創した性空上人です。性空上人は康保3年（966年）に書写山を開いたといわれ、天禄元年（970年）には現在の摩尼殿が建立されました。寛和2年（986年）に花山院が行幸された際には、円教寺の寺号を賜り、大講堂が建てられました。西の比叡山と称され、史跡に指定されている境内には25件の指定文化財があります。